トルバドゥール図像とミンネジンガー図像の可能性をめぐって

上尾　信也

「ああ君」と彼が言った、「僕が指で示すこの人は」／と彼は前を行く亡者を指で示した、「この人は／母国語を鍛えたという点では僕より巧みな職人だった。／恋の詩にせよ散文の物語にせよこの人は衆を抜いた。／リモージュの詩人の方が上手だと思いこんでいる／愚者には、勝手な事をしゃべらせておくがいい。／世間の人は真相よりも評判に目を向ける、／それだから技法とか道理とかに耳をかす前に／世評はもう定まってしまう。（ダンテ『神曲　煉獄篇』 第26歌115～123行、平川祐弘氏訳）。

ダンテ Dante Alighieri(1265頃-1321)が『神曲 *La Divina Commedia*』(1307頃-1321)で、ボローニャ生まれの詩人グイド・グニツェル Guido Guinizell(1235頃-1276頃)に、「指で示すこの人」としてアルノー・ダニエル Arnaut Daniel を、「リモージュの詩人」としてギロー・ド・ボルネイユ Guiraut de Borneil の 2 人のトルバドゥールを示し、その優劣を論じている。ダンテはまた「Antiquiores doctores」（古き師）としてペール・ドーヴェルニュ Peire d'Alvergne(1149－1168 頃活動)を挙げ、煉獄（煉獄篇　第6～9歌）では、イタリアのトルバドゥール(トロヴァトーレ)とされるマントーヴァ出身のソルデッロ[ソルデル](Sordello[Sordel](1220 頃 - 1269)を、好意をもって自分たちの案内役として登場させている。さらに、ペトラルカ Francesco Petrarca (1304-1374)は『愛の凱歌』(Trionfo d'amore)において、アルノーを 15 人の偉大なプロヴァンスの詩人の行列の先頭に置いている。トレチェント（1300 年代）初頭のイタリアでは、100 有余年前に活躍したとされる隣国フランス南部の詩人たちが、自らの詩歌の先達、称賛の対象として語られていた状況はどのような歴史的文脈（コンテキスト）によるのであろうか。

1、テキストとコンテキスト―Troubadour写本K, Iの性格

トルバドゥールと呼ばれる南仏の詩人たちの作品は、主要なもので 20 数冊の写本によって伝えられ、その多くは 13 世紀末から 14 世紀にかけ北イタリアで制作された（参照 1）。楽譜が詩歌に付されているものは G,M, R の 3 冊であり、伝記(vida)と作品解題(razo)が記された 5 冊ほどある。なかでも I,K(Paris, BNF, ms.Fr.854 et 12473)には伝記に彼らの肖像がイニシャル図像のミニアチュール（写本挿図）として付されている（Lemaitre, Jean-Loup, et Vielliard, Françoise (publiées par), avec la collaboration de Marie-Thérèse Gousset, Marie-Pierre Laffitte, and Philippe Palasi, *Portraits de troubadours: Initiales des chansonniers provençaux I et K (Paris, BNF, ms.Fr.854 et 12473)*. (Mémoires et Documents sur la Bas-Limousin,26.) Ussel: Museé du Pays d'Ussel, Center Troubar, 2006；Walter Meliga, 《Intavulare》, Tavole di canzonieri romanzi. I.Canzonieri provenzali,2. Bibliothèque nationale deFrance I (fr.854), K (fr.12473), a cura di Wa.Meliga, Modena, 2001, p.39-205）。

写本 I（羊皮紙、199ff　310×220mm(行長 210×155mm)）は、1275 から 1300 年にヴェネツィアで成立したとされる。その後 14 世紀末にはパリの王室図書館（Bibliothèque du roi）で《Provenceau. Livre des anciens poetes provenceaulx》として、フランソワ 1 世のブロワの王室図書館(Librairie royale de Blois)の 1518 年と 1544 年のコレクションリストに《Livre des anciens poetes provenceaux》として記載されている。fol.1 と 199v に Bibliothèque royale のスタンプがあり（17 世紀頃）、その後、フランス国立図書館 Bibliothèque nationale deFrance のコレクションに収蔵の所蔵歴を持つ。

写本 K（羊皮紙、XIII＋188ff　340×235mm(230×160mm)）も 1275 から 1300 年にヴェネツィアで成立したとされる。この写本は別冊 I 裏（別 I－XI）に「フルヴィオ・オルシーニ《ペトラルカとベンボの余白注解付き、120 のプロヴァンス詩人の詩》Fol.Iv Fulvio Orsini 《Poesice di ccnto venti poeti provcnzali tocco ncllc margini di mano dcl Petrarca e del Bembo in perg. In　fogl. Ful URS.》」とのタイトルがあり所有者の履歴となっている。また、ペトラルカ、 エステ家図書館(Biblioteque de la famille d'Este)、 ピエトロ・ベンボ枢機卿 PietroBembo、ヴェネツィアのコレクターのアルヴィーゼ・モチェニーゴ Alvise Mocenigo、フルヴィオ・オルシーニ、クエリーニ枢機卿 Angelo Maria Querini(1680-1755)が所蔵したとされ、教皇クレメンス 12 世により 1731 年に教皇庁図書館に収められた。だが、ナポレオンのイタリア遠征に伴い接収され 1797 年にパリ国立図書館に移されたとされる。

他にもイニシャル付き写本にはM（Paris, Bibliothèque Nationale, fonds français　l2474）とA（Rome, Biblioteca Apostolica vaticana, latini 5232）があり、いずれもヴァチカンの教皇庁の所蔵歴を持つ。Mは14世紀に成立し、伝記と解題の記載がないが、ピウス6世の紋章付きの写本で、カタルーニャの詩人カリテオCariteo、その後アンジェロ・コロッチAngelo Colocciが所有し、ヴァチカンの教皇庁のコルッチ図書館を経てパリ国立図書館へ収められた。

以上から、I,Kともに北部イタリアで13世紀末に、当時伝えられていたトルバドゥール(南仏)の詩歌が、何らかの目的によって、一部には当時のイタリア人の詩人たちの関与により編纂され成立し、その後Iは少なくても1300年代末には、戦利品かあるいは購入によりフランスの王家の所蔵となった。一方Kは他の写本同様イタリア内を転々とし最後には教皇庁のものとなったが、ナポレオンによりフランスに持ち運ばれ、IとKが揃うこととなったと推測される。特にIの所蔵歴については、ペスト禍といった14世紀の歴史的コンテキストとの関係が興味深いが後述するとして、詩人の関与については、14世紀に南フランスやカタローニャで、オック語やカタロニア語、イタリア語の文法とそれらの言語で伝えられたトルバドゥール文芸の普及が、詩歌集、注解書や文法書などの成立(参照表2)や、ガイ・サバール[喜びの知恵]会(*Consistori de la Gaya Sciensa*)といった学派形成によってなされたとする文学史研究におけるトルバドゥールの詩歌の継承の説明が示唆を与えてくれる。1100年から1200年代前半にかけて創作されたとされるオック語による文芸が、どうして100年ほどの時を経て1300年ころに北イタリアで編纂され写本として成立したかという問題は、ひとつには写本成立に至るまでの継承事情と写本制作の意図をうかがうことではあるが、さらにはその背景にある歴史的文脈にも立ち入らねばならない。ここでは、まず写本K、Iのイニシャル図像とテキストを見ることで、何を書き残そうとしてきたのかという視点をふくめて考えてみたい。

2　トルバドゥールのヴィダとイニシャル図像

I 142va

K 128b

最初のトルバドゥールとされるギヨーム9世　Guilhem IX d'Aquitaine (Lo coms de Peitieus)(1071-1126)はアキテーヌ公にしてポワティエ伯という封建領主であった。ヴィダ(伝記)では、「ポワティエ伯はこの世で最も雅びた男性の一人であり、また女性をたぶらかすことにかけて最もたけたる者の一人であった。彼はすぐれた武人であり、男伊達という点においても寛大であった。よく詩作し歌うことの心得もあった。そして長い間世界をまたにかけ奥方たちを騙した。彼の息子はノルマンディ女公を妻に迎え、それによりイギリスのヘンリー王の妻となり、若王とリチャードとブルターニュのジョフロワ伯の母となった娘をもうけた。」(「」内はヴィダの訳、中内克己氏による、以下同様だが下線は筆者による)とあり、その後のアリエノール・ダキテーヌを経てイングランド王リチャード1世(1157- 1199)にまで続く系図を述べていることから、ヴィダの成立が1200年前後であることは明らかであるが、興味深いのは写本Kの甲冑をつけた騎乗の図像である。装備したシールド(エキュ)〔楯〕とヘルム(オーム)〔兜〕、ランス(長槍)のペノン(槍旗)、カタフラクテース(バルド)〔馬鎧〕にみえなくもないが馬用の(紋章付き)サーコート(シュルコ)〔上っ張り〕は、黄金地に黒の鷲の紋章が描かれている。鷲といえば帝国紋章であり、後のアキテーヌ公家もポワティエ伯家も獅子を用いていたが、ギヨーム在世中にはどのような紋章が使われていたか、そもそも紋章が用いられていたか、さらにはこれは戦闘の情景なのかそれ以外なのかとさまざまな問題点が浮かび上がる。後に詳述するが、他の図像にも見られるこのような装束は図像の描かれた写本成立時期のコンテキストに比重を置いて考えるべきであろうことが、旧約聖書写本のミニアチュールの時代考証が紀元前のユダヤのものとどこまで一致するかなどといったことを述べるまでもなく、ひとまず前提であろう。

Cercamon K 119

Peire de Valeira　I 122

写本の図像はイニシャル図像の形をとっているが、ほぼテキストであるヴィダの内容を挿図としたものである。

ジョングルール jongleur(ジョグラール joglar) といわれるセルカモン Cercamon は、「セルカモンはガスコーニュ出身のジョグラールであった。そして彼は〈詩 vers〉と牧歌を古風に作った。そして彼は、自分が行ける到る処のすべての人びとを訪れた。そしてそのため、自らを〈人びとを尋ねる〉(Cercamon=Cherche-monde)と呼ばせたのであった。」と述べられたように.旅装であり、同じくジョグラールのペール・ド・ヴァレラ Peire de Valeira も旅装であるが、ハートを持つのは「くだらぬ、大した価値がない」人物評の所以であろうか。「ペール・ド・ヴァレラはガスコーニュの出身、アルノー・ギヨーム・ド・マルサン Arnaut Guillem de Marsan が領有する土地の出であった。彼はマルカブリュと同時代、同時期のジョグラールであった。彼は当時人びとが、木の葉や花や、歌声や鳥について、くだらぬものを作っていたような〈詩 vers〉を作った。彼の歌は大した価値はなかったし、彼もまたそうであった。」

Jaufré Rudel, I 121vb

Arnaut de Mareuil I 46

さらには物語化される図像もある。貴族であるジョフレ・リュデル Jaufré Rudel は騎乗でも描かれているが(K 107vb)、有名な「まだ見ぬ貴婦人に恋する物語」としても描かれた(写本 M でも f.165 に抱擁する二人の図像)。「ジョフレ・リュデル・ド・ブライユは非常に高貴なお人で、ブライユの君主であった。彼はアンチオキアから来た巡礼たちから、トリポリの伯爵夫人がすぐれた人だと聞き、彼女に会うことなしに恋したのであった。そして彼は彼女について、すばらしい旋律だが、つまらぬ言葉の数多くの〈詩 vers〉を作った。それから彼女に会おうと、十字軍に参加し、船出した。彼は船内で病に倒れ、瀕死の状態で、トリポリの宿屋に運び込まれた。そのことが伯爵夫人に知らされた。そこで彼女は駆けつけ、彼の寝台のところまで来て、彼を腕の中に抱いたのであった。彼はそれが伯爵夫人だと知り、たちどころに聴覚と嗅覚を取り戻した。そして彼は、彼女に会えるまで命をもちこたえさせ給うたことにつき、神を賛美した。やがてそのようにして、彼は彼女の腕の中で死んだのであった。彼女は手厚く彼を聖堂に埋葬させた。それからその日、彼の死を悼んで、彼女は修道女となったのである。」

聖職者にして歌人としてブルラッツ伯爵夫人に奉仕したアルノー・ド・マルイユ Arnaut de Mareuil の図像には騎乗のものがある一方で(写本 M、f.128)、写本 I では 書見台を譜面台のように使い、歌を作っているのか歌っているのかする様子がうかがえる図像もある。「アルノー・ド・マルイユは、ペリゴール司教区の、マルイユなる名の城下の生まれであった。彼は貧家の出の聖職者であった。そして彼は自分の学識だけでは生活ができなかったので、世界の各地を渡り歩いた。彼はよく歌を作る(trobar)術を心得、創造する才能があった。そして運命と幸運が、彼をかの勇敢なるレイモン伯の娘であった、ブルラッツ伯爵夫人の宮廷に導いた。彼女はタイユフェールと呼ばれていた、ベジエ子爵の妻であった。この

アルノーは風采はよし、歌はよし、それに文学作品もよく読んでいた。伯爵夫人は彼をよく助け大いなる名誉を与えていた。彼は彼女を恋するようになり数々の自作の歌(cansos)を彼女に捧げた。けれども彼は、彼女にもまた誰にも、自分がそれらの歌を作ったのだとは、敢えて言明はしないでいた。それどころか、それらを作ったのは他の者であると言っていた。しかるにたまたま、愛の神が彼の情熱を激しくかき立てたので、彼は次のような言葉ではじまる、一つの歌(canson)を作ったのであった。…」

Giraut de Bornelh K 4

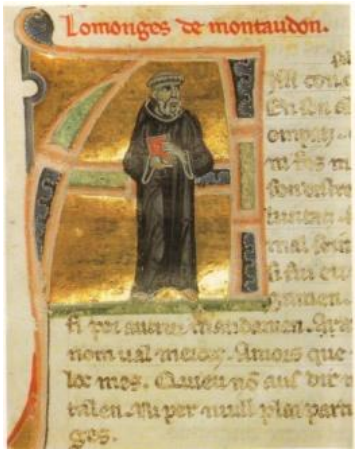
Gaucelm Faidit K 22

ダンテも言及したギロー・ド・ボルネイユ Giraut de Bornelh はヴィダそのままに 2 人の歌い手を連れた姿で描かれており、 ダンテの称賛もこのヴィダ、いやこの写本の図像を知った上ではないかと考えてしまいそうである。「ギロー・ド・ボルネイユはリムーザンの人、リモージュ子爵(Ademer V、 1148-1199)の有力な城の支配下にある、エクシドイユ地方の出であった。彼は身分は低かったが、学問と生まれながらの才気により抜かりのない人であった。彼は彼以前に存し、また彼より以後に生存したトルバドゥールの誰よりもすぐれていた。それ故に彼はトルバドゥールの師と呼ばれたし、愛や才気における精妙で所を得た言葉を理解するすべての者たちに今もなお〔そのように呼ばれている〕。彼は高貴な人びとや玄人たち、並びに彼のシャンソン(chansos)のすばらしい歌詞に注意を向けていた奥方たちに、高く評価された。そして彼の生活ぶりは、冬中は学校にとどまり文学を教え、夏の間はずっと宮廷回りをし、彼のシャンソンをうたう二人の歌い手を連れて行くという〔規則正しい〕ものであった。彼は妻を〔娶ることを〕決して望まなかった。そして稼いだものは全部自分の貧しい身内の者たちと、彼が生まれた村の教会に与えていた。その教会は昔も今もなおサン・ジェルヴェと呼ばれている。 そして、彼の大部分のシャンソンはここで書かれた〔とみなされている〕。」

コミカルなタッチで語られるのはゴーセルム・フェディト Gaucelm Faidit である。 ヴィダに言われるほど図像では奥方は太っていないのが悩ましいところではある。「ゴーセルム・フェディトはユゼルシュという名の、リムーザン司教区にある町の出であり、町人の伜であった。彼は世のいかなる人よりも歌は下手であったが、多くのすぐれた旋律とすばらしい歌詞を作った。彼はさいころ遊びで全財産を使い果したため、ジョングルールとなったのだった。彼はひどく気前のよい男で、飲み食いにかけては目がなく、そのため極度な肥満体となった。ずい分久しく贈り物も栄誉も受けられず、彼はひどく不運であった。そのため二十年以上も世界中を歩いて回った、彼自身も彼の歌も歓迎されもしなければ真価が認められもしなかったので。 彼はふしだら女を娶り、彼女を連れて長い間宮廷回りをした。その女の名前はギエルマ・モンジャ(Guillelma Monja)といった。彼女は非常な美人で大そう教養もあったが、彼と同じように太って肥満体となった。彼女はプロヴァンス辺境の、ベルナール・ダンデューズの藩領のアレスという富裕な村の出であった。 結局ボニファス・ド・モンフェラ侯殿(Boniface II de Montferrat、1207 年没)が彼に財産と衣裳を与え、彼自身と彼の歌とを、大いに価値あるものとしたのだった。」

Peire d'Alvernha K 1

「トルバドゥールの第一人者(lo premier bons trobaire)」、「皆の師」と語られたペール・ドーヴェルニュ Peire d'Alvernha　も相応しく白髭の老人の姿で描かれている。「ペール・ドーヴェルニュはクレルモン司教区の出であった。思慮深く教養の高い人であり、町民の息子であった。美男で容姿も端麗であった。彼は巧みに作詩作曲し歌も上手であり、山の向こうにあって、トルバドゥール中第一人者であり、詩(vers)を歌うためにそれまで作曲されたもので最高のメロディーを作ったのも、彼なのである」



Monge de Montaudon K 121

I 135

モワーヌ・ド・モントードン Monge de Montaudon はその名のとおり修道僧(モワーヌ)であり、ベネディクト会のオーリヤック修道院の僧であるため黒衣で描かれている。写本 I の「座してハイタカを手に留まらせ男と話す図」はヴィダスに語られた特権授受の逸話の挿図である。《モワーヌ・ド・モントードンはオーヴェルニュの人、オーリヤックの近くにあるヴィックという城の出であった。彼は貴族の身分であったが、オーリヤック修道院の修道僧になった。その大修道院長は彼にモントードンの小修道院を委ねた。そして彼はそこでその教会のためになるよう振舞った。修道院にいながら、彼はさまざまな歌節や国内の時事問題についてシルヴェンテスを作っていた。騎士や諸侯らは彼を修道院から迎えては大いに名誉を施し、彼が喜ぶもの求めるものをすべて与えたのだった。そしてこれをすべて彼はモントードンの、自分の小修道院へ寄進していたのである。 彼はいつも修道僧の服をまとい、自分の教会を大きくし立派にした。それからオーリヤックの大修道院長のもとに戻り、自分がモントードンの小修道院のために為した改善のことを報告し、こんどはアラゴンのアルフォンソ王の考えに従う許しを与えていただきたいと願った。そこで院長はその許しを彼に与えた。それで王は彼に肉を食べ、奥方たちに求愛し、歌い作詩作曲するよう仰せ付けられ、彼はそのようにした。 かくして彼はハイタカを授ける特権と共に、ピュイ・サント=マリの領主に封ぜられたのだった。 彼は久しく、そのピュイの宮廷がなくなるまで、そこの領主権を所有した。そしてそれからスペインへ行き、そこですべての王とすべての諸侯らにより非常な名誉を施された。スペインではヴィルフランシュという名の、オーリヤック修道院の管轄下にある小修道院に行った。それで大修道院長はそれを彼に委ねた。彼はその修道院を富ませ改善した。そしてそこで亡くなり生涯を終えたのだった。」

Peire Cardenal K 149

当時としては信じられない高齢 100 歳で死んだとされるペール・カルドナル Peire Cardenal の姿は、相応しく白髭を蓄えた図像であり、写本 M では「ジョングルールを連れて、遍歴した」と語られるように騎乗で描かれた。「ペール・カルドナルはヴレ地方の人、ル・ピュイ・ノートルダムの町の出身であった。貴紳の家柄の出で、騎士とその夫人の間の子息であった。そして幼い頃、父親は教会参事会員にしようと、彼をル・ピュイの大参事会に入れた。そこで彼は文学をまなび、飲み歌う術をしっかり身につけたのだった。 成人するにおよび、この世の虚栄に喜びをおぼえた。それというのも、自分が快活で、美男で、若いと感じたからだった。そして多くのすぐれた主題とすぐれた歌を創り出した。シャンソンも作ったが、その数は少なかった。しかし数多くのシルヴェンテスを作り、それらを彼は非常にすばらしい出来栄えと思った。それらの

シルヴェンテスにおいて、それをよく理解する者にとって、彼は多くのすぐれた主題と立派な手本を示した。彼のシルヴェンテスが示すとおり、この世の狂気を激しく非難し、悪辣な聖職者たちを厳しく糾弾しているからだ。そして王侯・貴族の宮廷を、彼のシルヴェンテスを歌うお抱えのジョングルールを連れて、遍歴していた。またアラゴンのジャック善良王（アラゴン王 Jacques I 征服王 1213-1276）やすぐれた領主たちから、大いに名誉を与えられ愛されたのだった。 ところで我が輩、作家たるミシェル・ド・ラ・トゥール師（maitre Michel de la Tour）は、ペール・カルドナルがこの世を去った時、彼は確実にほぼ百歳であったことをお知らせしておく。そして我が輩、前記ミシェルが、ニームの町においてこれらのシルヴェンテスを書きとめたのである。」

Bertran de Born, K 160

I 174v

ギヨーム9世で触れたようにイニシャル図像には武装した騎士の姿で数多くのトルバドゥールが描かれている。ヴィダスの記述などから「騎士」身分以上の者たちであることから単なる身分の指標とも思われるが、戦場での姿かあるいは他の場面での姿か、装備にはトルバドゥールの実像を考える上で興味深いヒントが隠されているように思える。また、武具の歴史は、人類の歴史が戦争の歴史であり、あらゆる文明は技術や文化を戦争目的のために発展させてきたことを考えると、武具・武装は、描かれたものたちが生きた時代と描いた時代の年代測定や時代考証の指標にもなる。

さてまずは、政治的風刺のシルヴェンテスを多く残し戦争詩人として名高いオートフォール城主ベルトラン・ド・ボルン Bertran de Bornである。ベルトランは南仏の有力な武将として、プランタジュネット＝アンジュー家のイングランド王ヘンリー（アンリ）2世と長子若王ヘンリーと、獅子心王リチャード1世と、カペー家のフランス王フィリップ2世と離合集散を繰り返し毀誉褒貶かまびすしいが、武人としての風評高かった人物である。「ベルトラン・ド・ボルンはペリゴール司教区の城主であり、オートフォールと呼ばれる城の所有者であった。彼はすべての隣人を相手に、ペリゴール伯(エリアス6世Elias VI Talairan、 Comte de Perigors、在位1158/66-1203)、リモージュ子爵（エマール5世 Aimar V、 1138-1199、Vescomte de Lemoges）、兄のコンスタンタン、およびリチャードがポワチエ伯であった間(1169-89)彼を相手に、常に戦争をおこなった。彼はりっぱな騎士であり、有能な戦士であり、よき恋人であり、またすぐれたトルバドゥールであった。また博学で話上手でもあった。不運と幸運を整える術も十分心得ていた。彼は、自分が望む時に、ヘンリー王とその子息を思いのままにした。しかも彼は常に、父と子と兄弟が、互いに反目していることを望んでいた。またフランス王とイギリス王が反目していることも常に望んだ。そして、彼らが平和でいたり、休戦をしていると、彼は直ちにシルヴェンテスによってその平和を乱し、彼らのおのおのがその平和によって、如何に面目を失っているかを示そうと努めるのであった。そのために彼は、そこから大きな利益を得たし大きな禍を招いたのである。」と語られたその名に恥じず、K, Iの写本ともに武装した騎乗図で描かれている。しかもIは一騎打ちの戦闘の場面と思われるが、シルヴェンテス「戦いと馬上試合」とそのラツォ（改題）に語られるようにトーナメント（馬上武芸試合、騎馬試合）での雄姿かもしれない。トルバドゥールやミンネジンガーと武芸試合の関係については後述したい。武具については、写本Kで単騎のホウバーグ(オベール)〔鎖帷子〕とアヴァンテイル（ヴァンターユ）〔垂れ〕付のコイフ（クワフ）〔頭巾〕あるいはショウス(ショス)〔脚部鎖鎧〕とオーム(ヘルム)〔兜〕という11, 12世紀の十字軍時代のフランス騎士のものだが、写本Iの一騎打ちでは両騎士とも、馬にはサーコート(シュルコ)〔上っ張り〕を着せホウバーグ(オベール)〔鎖帷子〕とショウス(ショス)〔脚部鎖鎧〕とオーム(ヘルム)〔兜〕である。武具はK, Iとも騎士槍(ランス)と（紋章付き）シールド(エキュ)〔楯〕だが、紋章は色分けのみで、あるいは簡素なものである。注目したいのは明確に鎖帷子とは色分けされた足の部分で、これが十字軍時代の鎖靴ではなく、グリーヴ(グレーヴ)〔脛当〕＋ソルレット（ソルレ）〔鉄靴〕としたらこれらは写本制作年代に近い14世紀の特徴である。ベルトランの生きた時代には拍車（スパー、エプロン）はあるが、他は13世紀以前には見られない。

I 89v:Gui d'Ussel

同様の足元についての騎乗図像の指摘は、他の貴族や騎士の出自のトルバドゥールの図像にも見られる。

「ギー・デュセルは、リムーザンの人で、身分の高い城主であった。彼と彼の兄弟たちおよび従兄弟のエリは、有力な城であるところのエセルの領主であった。なお彼の二人の兄弟は、一人はエーブル、もう一人はペール、従兄弟の方はエリという名であった。その四人共トルバドゥールであった。ギーはすぐれたシャンソンを、エリはすぐれた討論詩(tensos)を、そしてエーブルは辛辣な討論詩を創作し、それからピエールはその三人が作詩したもののすべての曲を作っていた。ギーはプリウドとモンフェランの教会参事会員であった。彼は長期にわたりオービュソンのマルグリット夫人(Madame Marguerite d'Aubusson)とモンフェラン伯爵夫人(le comtessa de Montferan)に求愛し、彼女らに敬意を表して多くのすぐれたシャンソンを作った。ところが教皇の特使[イノケンチウス 3 世の特使 Pierre de Castelnau]が彼に二度と再びシャンソンを作らぬことを誓わせたのである。そこで、彼としては、詩も歌も放棄したのだった。」 写本KのイニシャルBの図像に描かれたギー・デュセル Gui d'Ussel は、ホウバーグかサーコート(シュルコ)〔上っ張り〕か判然としないが、マフラ(ムウフル)〔手袋状の鎖袖〕、クレスト〔頂飾〕付きのオーム(ヘルム)〔兜〕、パウレイン(ジェニュイエール)〔膝当〕、鉄製グリーヴ(グレーヴ)〔脛当〕とソルレット(ソルレ)〔鉄靴〕であろう。武具はメイス〔棍棒〕を持ち、紋章付きのシールド(エキュ)〔楯〕である。

Savaric de Mauléon, I 152

サヴァリック・ド・モーレオン Savaric de Mauléon も騎乗であり、ホウバーグかサーコート(シュルコ)〔上っ張り〕、マフラ(ムウフル)〔手袋状の鎖袖〕、オーム(ヘルム)〔兜〕、パウレイン(ジェニュイエール)〔膝当〕あるいは鉄製グリーヴ(グレーヴ)〔脛当〕とソルレット(ソルレ)〔鉄靴〕、ランスとシールド(エキュ)〔楯〕である。こちらはオームとシールド、そして馬のサーコートは鮮やかな色彩の紋章のデザインが見られる。ヴィダでは、「サヴァリック・ド・モーレオンはポワトーの有力な諸侯であり、ルール〔ラウル〕・ド・モーレオンの息子であった。また彼はモーレオン、タルモン、フオントネー、シャテライヨン、ブーエ、ブノン、サン・ミシェラン・レルム、レー島、ユー島、ネストリーヴ、アングーラン、その他多くのよい土地の領主であった。彼は風采のよい、慇懃で、教養あり、また他の誰よりも寛大な騎士であった。彼はこの世の誰にもまして、気前のよさ、婦

人への礼譲、恋愛、騎馬試合、歌、作詩作曲、宮廷の娯楽、そして散財を愛好した。他のどの騎士よりも、貴婦人方や恋人たちの申し分ない友であったし、またその誰よりも、有能な人々と出会い彼らに気に入られることを望んだ。彼はかつてこの世に存在した、最もすぐれた武人であった。武人として、時には利益を得たこともあるし、時には損害を被ったこともある。彼が行った戦争は、いずれもフランス王とその兵士たちに対するものであった。そして、もしも誰かその執筆をせんとする者があれば、彼の素晴らしい行為について大巻の書ができるであろう。またそれは、最高の好意と長所と誠意を兼ね具え、自分がかつて一人の人間において行うのを見、あるいはその噂を耳にした中で最も立派な行為をなした人間の書となるであろう。しかもその上に、彼にはもっと行いをよくするという願望しかなかったのである。」と語られているところから、トーナメント(騎馬試合)での装束を思わせる。

Peire Bremon la Tort　I 141v

「ペール・ブレモン・ル・トール(Peire Bremon le Tort)はヴィエノワ地方の貧しい騎士であった。彼はすぐれたトルバドゥールで、すべての上流社会の人びとによって面目を施された。」とヴィダに語られたペールについては第2回(1147-1149)および第3回十字軍(1189-1192)の間に聖地で書かれた2つのシャンソンが残されていることから、十字軍の騎士であった。ペールの騎乗図は、ホウバーグ、マフラ(ムウフル)〔手袋状の鎖袖〕、クレスト〔頂飾〕付きのオーム(ヘルム)〔兜〕、パウレイン(ジェニュイエール)〔膝当〕、鉄製グリーヴ(グレーヴ)〔脛当〕とソルレット(ソルレ)〔鉄靴〕であろう。武具はランスを持ち、オームと同色のシールド(エキュ)〔楯〕が簡単な紋章的意味合いを持っている。ペールのような貧しい騎士にとって出世の糸口が十字軍の従軍であったと同時に、それ以降はトーナメントが下級貴族の出世の機会とされていたことは興味深い。

ここまでトルバドゥールのヴィダ(伝記)の挿図であるイニシャル図像をみてきた。特に騎乗図像については、騎乗は身分の指標、旅(遍歴)の指標、それらの物語(伝記)との関連といった解釈がなされよう。雑駁にいえば、さらにトルバドゥールが活躍したとされる時代(十字軍時代)と写本成立年代(1300年前後)の時代考証や写本年代の測定が描かれた図像の武装から推測できることも確認できた。しかし、図像はまだ多くのことを物語っているように思える。騎士の騎乗図に描かれた武装が現実の戦闘ではなくトーナメント(武芸試合)の装束であるかもしれない可能性である。このことは「トルバドゥール」の活動や実像を考える上で重要である。そこで、オック語圏のトルバドゥールと並び称されるドイツ語圏の宮廷歌人ミンネジンガーを、トルバドゥール写本K, Iと近い時期に成立したとされるマネッセ写本に、イニシャル図像とミニアチュール(挿図)の違いはあるが、韻文(詩歌)で書かれた物語の挿図として数多く残されたミンネジンガーの図像をもとにこれらの問題を考えてみたい。

3 ミンネジンガーの肖像―マネッセ写本の騎士とトーナメント

ミンネジンガーの作品を伝える資料として、中世ドイツ語による歌謡を収めた以下の写本があり、歌合戦あるいは歌合戦に登場する歌人たちの作品が伝えられている。

写本C:《マネッセ歌謡写本(大ハイデルベルク歌謡写本)Manessische Liederhandschrift (Grosse Heidelberger Liederhandschrift)》、ハイデルベルク大学図書館蔵 Pal.germ.848 号写本(14 世紀初頭チューリッヒで成立)。数多くのミニアチュール付き。

他に写本J:《イエーナ歌謡写本 Jenaer Liederhandschrift》イエーナ大学図書館蔵 El.f.101 号写本(14 世紀中頃)、写本K:《コルマール歌謡写本 Kolmar Liederhandschrift》ミュンヘン、バイエルン国立図書館蔵 Cgm 4997 号写本(現存する写本は 15 世紀中頃マインツでネストラー・フォン・シュパイエルによって制作、あるいはヴォルムスで成立、1546 年にイェルク・ヴィックラムが購入し、これがコルマールのマイスタージンガー兄弟団の設立の礎に)。写本L:《ローエングリン写本 Lohengrinhandschrift A》、ハイデルベルク図書館蔵(14 世紀前半成立)。

なかでも最大かつ重要なものは《マネッセ歌謡写本(Die Manessische Liederhandschrift)》である。《マネッセ歌謡写本》は、今日ハイデルベルク大学図書館に所収されている《Cod. Pal[atinus] Germ[anicus] 848 号写本》で、《大ハイデルベルク歌謡写本 (Die große Heidelberger Liederhandschrift)》とも呼ばれる。マネッセの名の由来は 1310-30 年にかけてチューリッヒの門閥リューディガー・マネッセの立案により編纂成立したことによる(主要部分が完成した 1304 年から補足が付けられた 1340 年頃の間に作成)。『緑のハインリヒ』などのロマン主義の作家でチューリヒ出身の Gottfried Keller(1819-1890)は『ハドラウブ Hadlaub、 Züricher Novellen』(1878)で編纂者はミンネゼンガーの一人であるヨハネス・ハドラウブ Johannes Hadlaub(13 世紀末-1340)としている。ホーエンザックス男爵が所有していた時に、メルヒオール・ゴルトアスト Melchior Goldast が、その抜粋を出版しているが、それ以前の経歴は不明である。1657 年以降は、フランス王立図書館からフランス国立図書館に移管され、1888 年にヴィルヘルム 1 世やビスマルクが中心となった寄付金によりハイデルベルグ大学が購入し今に伝わる。

ミンネジンガーの歌謡(ミンネザンク)写本中最大の 426フォリオからなり、うち 138 には、宮廷における自らの理想像を描いたとされる歌人の彩色肖像が挿図に描かれている。これらの肖像画には、武芸試合(トーナメント)の装束で描かれた歌人像が多い。具体的にトーナメントの情景を歌った歌謡もあるが、多くはミンネジンガーたちとトーナメントの関係を示唆しているものと思われる。ミンネジンガーの身分はおおむね写本が作成されたのは、多くの詩人の死後 100 年以上後であるため、本人と似ているか、あるいは紋章の正確さについては疑問があるが、数多く模写されて広まっている。各詩人の順番は概ね身分の順で、神聖ローマ皇帝ハインリヒ 6 世から始まり、王侯貴族から家人(ミニステリアーレン)層であった下級騎士や従士、さらには後期には市民とされるものまでいた。家人以下の領地を持たない貴族身分たちにとって、トーナメントが自らの出世の糸口であり、トーナメントが催される祝祭の祝宴において歌謡のひとつも披露することも、重要な「習い」であり、これも主催者の「覚えめでたき」者として庇護を受けるきっかけになったかもしれない。後世 15 世紀に、トーナメントと恋愛歌(ミンネザンク)という〈騎士道〉が礼賛され、ヴォルフラムをはじめとするミンネジンガーたちによってアーサー王の物語群などの騎士文学が北フランスからドイツの宮廷にもたらされたとされ、トーナメントで活躍する理想の騎士としてのミンネジンガーの増幅されたイメージが写本の肖像画に描きこまれた。

6r : Kaiser Heinrich VI

さて、マネッセ写本の冒頭を飾るのは皇帝ハインリヒ 6 世 Kaiser Heinrich VI(1165-1197、在位 1190-1197)である。ハインリヒは紫紅色のマントをつけ、帝冠を被り、右手に権威の象徴である帝杓をもち、左手には帝権と王権の象徴の十字架付き地球儀のかわりに大きな銘帯をもつという儀礼の際の皇帝の正装で描かれている。銘帯に銘はなく、歌人と詩

人のアトリビュートと考えられる。ハインリヒ6世像はこの写本中の他の人物像に比べてより大きく描かれ、金地に赤い舌と鉤爪をもつ単頭の黒い帝国鷲の帝国の紋章が付されている。「余は歌で、捨てようとも捨てきれぬ愛の価値を讃えよう。余がまさにわが口で愛を讃えるには、嘆かわしくも、多くの日々を費やした。失うことは痛ましい愛の前でこの歌を歌う者は、女でも男でも、余からの賛辞と思って欲しい。余がミンネともにいるならば帝国と諸国はわが支配下にあるが、それから別れを告げるならばすべてのわが権力とわが帝国は消え去っていく。そのときには恋焦がれる苦悩が我が物となる。僥倖が生き返るか再び消え去るか、この変遷は愛を通じて墓場まで続いていこう。余はミンネを心の底より愛し、あらゆる時に心のうちにも外にでも堅く思い続ける。多くの困難に置かれていようが、愛には何の代償があろうか。愛は正しき方法での友情を示す。余が愛を見捨てる以前にはるか、余は王冠を失っている。たとえ王冠がわが頭上にないとしても、余がすばらしき日々を送ることができると信じない者は誤っている。愛がなかったとしたら、いうべきことは何もない。愛を失ったとしたら、もはや何をもっていよう。女であろうが男であろうが喜びの何の役には立たない、わが最良の慰めに余は魅了されている。」(Pfaff, Fridrich (Hrsg.), *Die grosse Heidelberger Liederhandschrift (Codex Manesse),* In getreuen Textabdruck herausgegeben con Fridrich Pfaff, Titleausgabe der zweiten, verbesserten und ergänzten Auflage bearbeitet von Hellmut Salowsky, mit einem Verzeichnis der Strophenanfänge und 7 Schrifttafeln, Heidelberg: Univerasitätsverlag C. Winter 1984　以下、韻文訳はこれによる)とあるように、ミンネジンガーの詩歌の写本の冒頭には相応しい韻文とその挿図であるが、それほど政治的に強力な皇帝とは言えなかったハインリヒがどうして第一位におかれたのであろうか。後世の評価では父フリードリヒ1世赤髭帝 Friedrich I. Barbarossa(1123-1190、在位 1152-1190)、息子フリードリヒ2世(1194-1250、在位 1215-1250)に比べて芳しくないイメージがあるが、シュタウフェン家代々のイタリア政策において、シチリア王位を得るなど成果を上げている。シチリア王グリエルモ 2 世の王女コスタンツァとの結婚で継承権をえた王位をめぐって、シチリア王タンクレーディとそれを支持するイングランド王リチャード 1 世 Richard I　(1157-1199、在位 1189-1199)やローマ教皇と対立するがフランス王フィリップ 2 世尊厳王 Philippe II Auguste　(1165-1223、在位 1180-1223)と手を結び、1194 年にタンクレーディの病死とともに王位を得るのである。十字軍遠征から帰国途上にあったリチャード 1 世を捕らえた事件は後に伝説として語り継がれ、されには東ローマ帝国に圧力をかけるなど皇帝権力の安定した基盤を作ろうとした矢先に十字軍への途上メッシーナで 32 歳の若さでマラリアにより急死してしまう(山辺規子『ノルマン騎士の地中海興亡史』、 菊池良生『神聖ローマ帝国』参照)。ミンネジンガーとしては、仕えた宮廷歌人フリードリヒ・フォン・ハウゼン Friderich von Husen/Friedrich von Hausen (1150?-1190)の影響を受けた歌3篇が残存するなど、確かにマネッセ写本の冒頭にふさわしい「皇帝」かもしれない。これはまたマネッセ写本の成立時期(1300 年代初頭)のチューリヒをはじめとするスイスの事情にも関係があろう。

フリードリヒ 2 世の死(1250 年)からはじまる大空位時代は、ルドルフ 1 世 Rudolf von Habsburg(1218-1291、在位 1273 -1291)をはじめとするハプスブルク家の台頭を促したが、他の選帝侯との対立を生むことになる。ナッサウ家のアドルフを退位させルドルフの長男アルプレヒト 1 世(1255-1308、在位 1298-1308)が後を継ぐが、ハプスブルクの発祥地スイスではシラーJohann Christoph Friedrich von Schiller(1759-1805)の戯曲『ヴィルヘルム・テル Wilhelm Tell』(1804)に伝えられるように、ゲスラーらの代官支配で悪政が敷かれ、アルプレヒトやハプスブルクへの反感が強まっていた。マネッセ写本の制作されたチューリヒはイタリアとドイツを結ぶアルプス山脈北側の交通の要所であったことから、皇帝が好んで滞在し、経済的な発展を遂げる。1218 年以降ハプスブルク家の支配下に入るが、独立帝国都市の体裁を取るようになり、自治機運が高まる。その矢先アルプレヒト 1 世は末弟に 1308 年に暗殺されると、選帝侯会議は反ハプスブルクの旗頭ルクセンブルク家のハイリンヒ 7 世 Heinrich VII(1275-1313、在位 1308-1313)を王に選んだ。ハインリヒ7世はスイス原初3州ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデンを帝国直属として独立させる。1310 年にはローマに赴き、枢機卿からではあるがフリードリヒ2世以来の戴冠式を挙げる。ゲルフィ(皇帝派)とギベリーニ(教皇派)の闘争下のこのイタリア遠征の際ダンテは『帝政論 *De Monarchia*』(1310-1313?)を献じ、人格的に優れ、責任感に強い、人望の厚い名君と絶賛したが、ナポリ遠征の途上、死亡する。アヴィニョンの教皇とフランスによる暗殺という説もある。

1193 年のフランス王フィリップ 2 世や後のイングランド王ジョンと結んだ皇帝ハインリヒ 6 世とオーストリア大公レオポルト 4 世による獅子心王リチャード 1 世の捕囚から始まる物語は、1206、07 年と伝えられる父フリードリヒの母方の祖父がフリードリヒ2世帝であったテューリンゲン方伯ヘルマンの宮廷でのヴァルトブルク歌合戦とつながるなど、1200 年前後の政治状況はミンネジンガーの詩歌に反映されている例もある。それらの詩歌を写本として編纂したのは反ハプスブルク感情を有すスイスのチューリヒであり、そこにはシュタウフェン朝への憧憬とルクセンブルク家との結託といった何らかの政治的文脈がマネッセ写本の成立に関わっていたであろうことが推測されよう。

Walther von der Vogelweide, fol.124r

韻文の挿図であることが明確なのがミンネジンガーの代表と評されるヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ(殿 Herr) Herr Walther von der Vogelweide の図像である。「私は岩の上に座り、脚を組み、肘をつき、腕を曲げ、顎と頬を支えた。そこで私は沈思黙考した。いかにこの世で人は生きるべきかと。何の答えも与えられなかった。傷つけること無しに人は 3 つのことをなすことができるかの。最初の二つは名声と富、一方は一方を妨げる。第三は神の恩寵、他の二つを光で覆い隠すほどの。箱の中に留めおくことができるなら、されど富と世の名声とさらに神の恩寵が箱の中に入ることはありえない。小道も街路も遮られ、不信が待ち伏せ、暴力が通りを支配し、平和と正義はともに傷ついた。神の恩寵も安全な道案内でもなく、名声も富ももはや安全ではない。」(Pfaff ,Codex Manesse 420:40-421:19)。皇帝ハインリヒの図像と同じく、紋章盾とクレスト付きオーム〔兜〕が描きこまれており、他のミンネジンガーも同様に結果的に人物の同定の役割を果たしている(図像と韻文の物語性については、Klingsor von Ungerland【Pfaff ,Codex Manesse 711:30-746:33】UB Heidelberg, Cod. Pal. Germ. 848,220a-225d の挿図に関連する拙稿「〈ヴァルトブルクの歌合戦〉伝説」http://www.toho.ac.jp/college/2007kiyou/pdf/07agario.pdf を参照)。

149v: Herr Wolfram von Eschenbach

ヴァルターとともにミンネジンガーを代表するのがヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ殿 Herr Wolfram von Eschenbach であり、紋章入り楯、前飾り付き兜、甲冑で武装したその姿は後に挙げるトーナメント図像との類似が指摘される(同様のトーナメント仕様の武装図像には、54r: Herr Rudolf von Rotenburg 、82v: Der Schenk von Limburg、122r: Herr Heinrich von Rugge、160v: Wachsmut von Künzingen、166v: Herr Walther von Metze、184v:Herr

Hartmann von Aue、実際に多くのトーナメントに参加し勝利した 237r: Herr Ulrich von Lichtenstein などがある)。

184v: Herr Hartmann von Aue

237r: Herr Ulrich von Lichtenstein

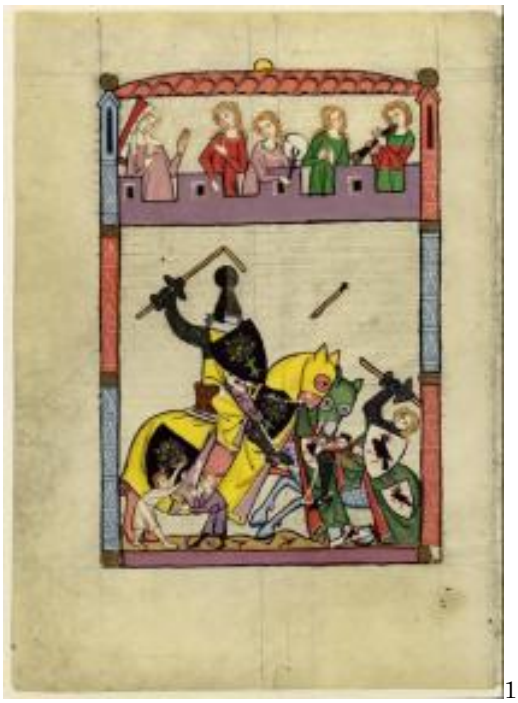
231r: Winli

11v: Herzog Heinrich von Breslau

韻文で語られるトーナメントの情景を直接挿図にしたものにウィンリ Winli の図像がある。ウィンリは、スイスのウンターヴァルデン地方の出身とされ、13 世紀前半に高きミンネに属する 8 編の歌が残されている。図像には、ウィンリが武芸試合に参加し、従者がいきり立つ馬を繋ごうとしているができない。左の美しい貴婦人は彼の豪華な大兜を捧げ持っているが、彼自身は右の愛する貴婦人から離れることができない。騎士の栄誉の印である盾は彼女に委ねられ、中世の証の指輪が騎士に渡されようとしている。彼が盾を受け取ったときに試合は始まるといった様子が描写され、韻文には、「おお、この深き心の嘆きよ、今日この日、愛しき人、貴女が私から去っていくとき、貴女は誰に恋に焦がれた貴婦人を譲るのか？貴婦人がしなやかな白い腕を愛しい男に絡ませられないことなど許されようか。どのように助けることができようか？貴女の宮廷での姿、毅然さ、寛大さは、剣と槍と兜と盾をとって私を英雄たちによる光輝ある戦いの場に誘います。」(Pfaff ,Codex Manesse 769:4－769:15 (24))とあり、まさにトーナメントの戦いの場に赴く直前の情景である。

このようなトーナメントの戦いとその前後の情景では、勝利を捧げる貴婦人とともに描かれている図像がいくつか見られる。ブレスラウ公ハインリヒ Herzog Heinrich von Breslau は勝利の後の桂冠を桟敷の貴婦人から授けられ、ヴァルター・フォン・クリンゲン殿 Herr Walther von Klingen やラッパースヴィル宮宰アルブレヒト Albrecht Marschall von Rapperswil は戦っている騎士たちを桟敷の貴婦人たちが観戦している情景である(他にもトーナメント図像として、17r: Der Herzog von Anhalt、18r: Herzog Johann von Brabant、61v: Herr Heinrich von Frauenberg、190v: Johann von Ringgenberg、197v: Herr Goesli von Ehenheim、204r: Von Scharpfenberg、321v: Herr Dietmar der Setzer、397v: Der Dürner がある。また実際の戦闘と思われる図像には、26r: Graf Friedrich von Leinigen、42r: Graf Albrecht von Heigerloch、43v: Graf Wernher von Homberg、226v: Kristan von Luppin, eine Thüring、229v: Der Düring、253v: Der Püller、255r: Von Trostberg があるが、峻別や史実との関連については別の機会に論じたい。)

52r: Herr Walther von Klingen


192v: Albrecht Marschall von Rapperswil

マネッセ写本に描かれたトーナメント図像とそれに参加する 12,13 世紀の「騎士」、そしてミンネジンガーとの関係、さらには写本 K,I に描かれたトルバドゥールの肖像とトーナメントとの関連を考えるにあたり、中世のトーナメントの様相をみてみたい。一般に事典的な記述では、トーナメントは中世騎士文学や騎士道と関連付けて語られることが多い。「騎士道の時代のスポーツであり学校であった。高名な戦士の訓練の場であると共に、無名の騎士や身分の低い騎士に世に出る機会を与える場であり、知行地のない騎士の出世の場であった。大衆に人気のある見せ物であった。トーナメントは、生死をかけて危険な武器を用いて、じっさいの戦いを行うことからはじまったが、時の経過と共に、危険があっても程度問題というほどの見せ物となった。」(「トーナメント Tournament」G・オーデン著堀越孝一監訳『西洋騎士道事典』東京:原書房 1991 年)。社会史としてのトーナメントの記述では、「中世軍人貴族階級の最高の娯楽のひとつであり、ゲーム乱暴なゲームでもあれば、祝祭でもあった。ある種の文学作品や映画に媒介されたステレオタイプなイメージとは逆に、たまのこうした活動は、中世軍事社会の発展につれて、さまざまな形をとった。」(「騎馬試合 Tournois」アグネ・ジェラール著池田健二訳『ヨーロッパ中世社会史事典』東京:藤原書店 1991 年)とされ、また、対決し捕虜にした騎士の身代金入手や、戦士のストレス解消と武具や戦術のテストといった経済や軍事上の身入りの観点からも語られる。12 世紀には、「騎馬試合は何より力のはけ口となる。年に数度、騎士たちは「巡業」に旅立ち、名を上げ、無為を克服し、身代金や戦利品をかき集めて金持ちになるために戦う。」状況から、13 世紀には「騎士の振舞はみやび(クールトワ)や高潔さ(ジェネロシテ)の理想

に影響され、変容する。騎馬試合は、「円卓会議(ターブル・ロンド)」と呼ばれる祭りとなり、競技大会となる。」といった騎士道との相互の影響がみられるが、トーナメント研究の史料がいわゆる文学に属する文献資料が多いこともあり、他の 1 次史料からの裏付けを期待したいところである。中世末期には、騎馬試合は複雑な演出とさまざまな『規則』にのっとった一種の儀式におきかえられる。戦闘には向かない豪華な馬飾りをつけた馬や重装備のコスチュームが登場する。この時代的な変化の背景には伸張する王権との関連が指摘される。「トーナメント(馬上武芸試合)や騎士叙任や宗教行列のような儀式で王が中心的役割を務めたのは、王権の威信を高め、臨席する貴族集団の注目を集めるためであった。十分なコミュニケーションと巧妙な保護とは、王権の成功に不可欠なものであった。」(「王権」H・R・ロイン編魚住昌良監訳『西洋中世史事典』東京:東洋書林 1999 年)。また詳細については、Barber と Barker『トーナメント—中世の騎馬武芸試合・騎士道・ページェント』(Barber, Richard & Barker, Juliet, *Tournaments: Jousts, Chivalry and Pageants in the Middle Ages.* Woodbridge(Suffolk): Boydell & Brewer, 1989)で論じているなど祝祭と関係する研究が多い(Bèhar, Pierre & Helen Watanabe-O'Kelly, *Spectacvlvm europævm. Theatre and Spectacle in Europe/ Histoire du spectacle en Europe*(1580-1750), 〈Wolfenbütteler Arbeiten zur Barockforschung, Bd.31〉, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 1999. ; Clephan, R.Coltman (Robert Coltman), *The Medieval Tournament*, New York: Dover Publications, 1995; orig.: *Tournament, Its Period and Phases*, London: Methuen 1919.;Heers, Jacques, *Fêtes, jeux et joutes dans les sociétés d'Occidentà la fin du moyen âge*, Paris/Montreal: Institute d'études médiévales 1971. Kipling, Gordon, *Enter the King: Theatre, Liturgy, and Ritual in the Medieval Civic Triumph*. Oxford: Clarendon Press/ New York: Oxford University Press, 1998.; Price, Brian R., *The Book of the Tournament: Essays on Knighthood and Chivalry*. Chicago Speculum Press, 1991; Chivalry Bookshelf, 2002;Pulega, Andrea, *Ludi e spettacoli nel medioevo. I tornei di dame,* Milano: Cisalpino-Goliardica, 1970.;Van den Neste, Evelyne, *Tournois, jotes, pas d'armes dans les villes de Flandre à la fin du moyen âge (1300-1486)*. Preface by Michel Pastoureau. <Mémoires et Documents de l'Ecole des Chartes,47>, Paris: École des Chartes [Librairie H.Champion/ Librairie Droz], 1996。騎馬については Hyland, Ann, *The Horse in the Middle Ages*, Stroud:Sutton,1999.)。

ミンネジンガーやトルバドゥールの活動もこのトーナメントの文脈の中でとらえていくならば、トルバドゥールやミンネジンガーと呼ばれた特に騎士や家人(ミニステリアーレン)といったさまざまな身分の者たちが実際にトーナメントに参加した可能性もうかがえる。それが写本編纂制作時の 1300 年前後において、トーナメントに「昼は試合、夜は宴会」戦う者と歌う者として参加する宮廷歌人の立身出世物語という文脈が加味され、さらには当時のトーナメントさながらの様相が武具・衣裳・情況・紋章といった細部にわたり特に図像で再現されていったのではないだろうか。その背景には、武力の王権の象徴としてのトーナメントの発生が同時トーナメントに関わり伝える者にも権威の象徴の分け前を与えたであろうこともあった。

中世以降のトーナメントについて、Watanabe-O'Kelly は「武芸試合/騎士武芸試合と騎馬バレエ(トーナメント/トゥルノワ、カルーゼル)」(Helen Watanabe-O'Kelly, (Université d'Oxford), Tournaments in Europe, pp.593-639 in TOURNAMENTS/ TOURNOIS ET CARROUSELS of Bèhar, Pierre & Helen Watanabe-O'Kelly, *Spectacvlvm europævm. Theatre and Spectacle in Europe/ Histoire du spectacle en Europe*(1580-1750), 1999.で次のように定義している。「武芸試合/騎士武芸試合、騎馬バレエ(トーナメント/トゥルノワ、カルーゼル)」の語義が明確に区分されているのはフランスのみ、イタリアやスペインでは史料上も学術用語としても中世のトーナメントとコンテストやスペクタクル両方を、馬上・徒歩・馬車でも仮装でも演劇であっても「トーナメント」は指す。イングランドではそれらすべてを含む。フランスで「カルーゼル」は 1559 年アンリ 2 世の死に際して用いられ、これは「馬上槍試合 joust」や「騎槍試合 tilt」が終焉を迎えてはいないが、騎馬バレエ(カルーゼル carrousel)と呼ばれる新しい形式のトーナメントの発端となった。さらに、1560 から 1750 年までのトーナメントを以下のように区分した。

●馬上槍(騎乗槍)試合(ジュースト[ジャウスト]、ジュウト、ランツェンゲシュテッヒ)joust, joute, Lanzengestech:騎士 槍を用いた一対一の馬上槍試合、[個人戦 13 世紀中頃より](16 世紀中頃以前には様々な形式の騎槍試合を指すあまりに多くのドイツ語がある)

●騎槍試合(ティルト)tilt, course à la barrière, Ballienrennen:木製の板塀(バリエール)越しの騎槍試合、ジュースト/ジャウストもティルト[原意は幕]も下馬した後は両刃剣(ソード)で戦闘を続けた。

●徒歩槍試合 foot tournament, tournoi à pied, torneo a pie, Fußturnier:個人戦でも団体戦でも徒歩による、腰の高さの板塀越しに長槍と両刃剣を用いる戦闘。英語ではバリア barriers と呼ばれしばしば室内で行なわれた。

●フォラ(フォリア)folla(folia), foule:個人戦の騎槍試合や徒歩槍試 合に続く団体戦

●樽桶騎槍試合 Kübelstechen:対戦者が詰め物の衣装を着て樽桶を被り老いぼれ馬に跨がったドイツ語圏でみられた滑稽な騎槍試合(ジュースト)。

●環的騎馬試合 running at a the ring, course de bague, Ringrennen:騎乗の競技者が頭や肩の高さに吊した環(リング)を騎槍で突き取る馬術競技。

●槍的騎馬試合 running at the quintain, course de quintain, corrir al estafermo：ムーア人やトルコ人像の頭の槍的を突く馬術競技。競技者が像のもつ盾を突くと像が回転して競技者を打ったりするヴァリエーションが多い。ファカン faquin サラシーノ saracino といった用語も（Lucien Clare(1983)参照）
●頭的騎馬試合 running at the head, course des têtes, Kopfrennen：騎乗の競技者が次々と、両刃剣、投槍（ジャヴリン）、騎槍、輪燧短銃（ピストル）などの武器で異なる高さに一列に配置されたムーアやトルコ人の頭などの3、4の的を打つ馬術競技。
●投擲試合（フエゴ・デ・カーニャス）juego de cañas, jeu de cannes： 背後を楯で防御しながら一方が他方に投槍で攻撃するスペインの団体戦。
●投弾試合（フエゴ・デ・アルカンシャス；「カリーセル」）juego de alcancías, giouco de'caroselli, 'carisell'：攻撃側が陶器の空洞の球を敵側に投げつけ攻撃する団体戦。スペインで「火炎弾試合（フエゴ・デ・アルカンシャス）juego de alcancías」と呼ばれたものが機嫌。多様な綴りがある「カリーセル」の用語は三十年戦争以前のドイツの宮廷で、「ジョコ・デ・カロセッリ giouco de'caroselli」はイタリアで、「karuselløb」はデンマークで用いられた。
●貴婦人の環的騎馬試合'Damenringrennen'(ladies' running at the ring)：環的騎馬試合（頭的の場合は「貴婦人の頭的騎馬試合 Damenkopfrennen」）の比較的後期のヴァリエーション。貴婦人たちが背後で求婚者が御す天蓋なしの馬車（稀に乗用馬橇）に乗り環や頭的を槍で突く。
●騎馬バレ horse ballet, ballet des chevaux, balletto a cavallo, Roßbalett：試合競技ではなく、一団の騎手たちが音楽にあわせて乗馬する「高等馬術」の動きを見せるスペクタクル（見世物）。

もはや、トーナメントは公的権力の祝祭の一環の演出された出し物として挙行される。参加する騎士たちは、騎士の役割を演じ、トーナメントの試合に勝ち、相応しき振る舞い・教養として詩歌を創作し語り歌うことで立身出世の糸口となるといった仕掛けはもはや見られない。また、トーナメントとその騎士たちを、中世騎士文学として、あるいはトルバドゥールやミンネジンガーの姿として、語り伝えていく詩人やジョングルールの姿もそこにはない。公式の祝祭本として制作された祝祭の記録にその威容は、権力の示威の記念碑として残されるのである。

現代においても、トーナメントのイメージは増幅される。トーナメントの幻影はたとえば、Klein「栄誉のための戦い—対戦スポーツ：映画の中のトーナメント（武芸試合）」（Thomas Klein, Kampf um Ehre – Kampfsport：Ritterturniere im Film, in: Mischa Meier und Simona Slanička（Hrsg.), *Antike und Mittelalter im Film: Konstruktion - Dokumentation – Projektion*, Köln/Weimar/Wien: Boehlau, 2007 で論じているが、映画に描かれた中世像の研究は、かつての 18, 19 世紀の史学や文芸がどのように「中世」像を構築してきたかの問題とも関連し興味深い。

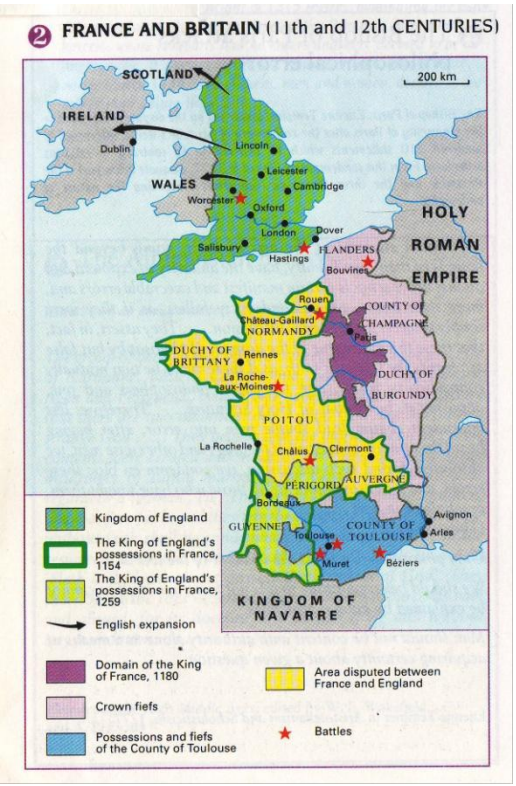
写本成立事情と図像のコンテキストを考える上で、なぜ物語が伝えら書き残されるかという疑問に対し、理想の宮廷と騎士道物語という文脈から捉える文学史的解釈はひとつの有効性をもつ。11 世紀末から 12 世紀半ばにかけては、現存最古(11 世紀末成立)の『ロランの歌 chanson de Roland』をはじめとする 80 篇の口誦叙事詩群である武勲詩 chanson de gest の時代である。8から9世紀のカロリング朝王侯の武勲を描いているものから、初期十字軍の高揚を背景に、封建戦士精神とキリスト教倫理が結びついた共同体意識が武勲詩には投影されている。12 世紀には、後の現代フランス語に通じる北仏のオイル語 langue d'oil に対する南仏のオック語 langue d'oc 圏においてトルバドゥールの文芸が現れる。ギヨーム 9 世にはじまり 12 世紀末に活躍したベルナール・ド・ヴァンタドゥールにいたる「女性を男性と対等以上にみなし、恋愛を狂気ではなく精神の飛翔の契機とみなす」恋愛叙情の詩歌は北仏にもたらされ、トルヴェールといわれる者達によって継承されたが、彼らの歌う愛には肉体への賛美・欲望の表現がみられなくなったとする。12 世紀にはまた『トリスタンとイズーTristan et Iseut』をはじめとする宮廷風騎士道物語 roman courtois が諸侯や騎士の間で流行した。さらにクレティヤン・ド・トロワの『ランスロ、または荷車の騎士 Lancelot ou le chevalier a la charette』(1177-80 頃)や『ペルスヴァル、または聖杯物語 Perceval ou le conte de Graal』(1181-90 頃)は未完ながら、他の作者による「聖杯物語群 Cycle du Graal」と呼ばれる物語を生み出すことになった。

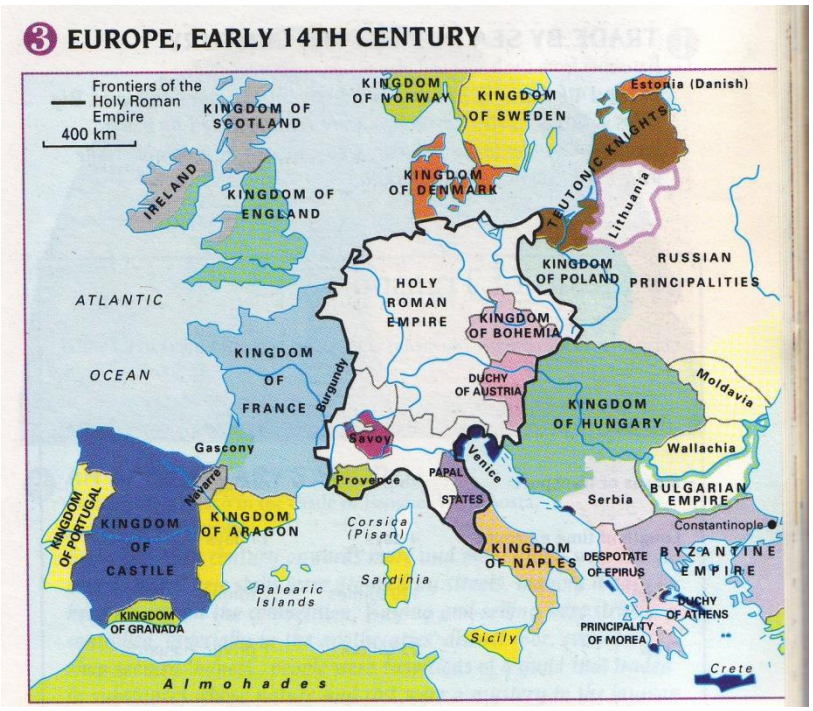
12世紀のトルバドゥールや騎士道物語群が語ったものは架空の世界のみではなかった。十字軍もまた「物語」として語られ、現実と架空の物語が混然となって広まっていった。そこに加味されるのが擬似物語としてのトーナメントの隆盛である。現実の戦争に限らずトーナメントの「武勲」情報をも、語られ伝えられようになる。その伝播者となったのは、あるときにはトーナメントの武勲者であったかもしれないトルバドゥールやミンネジンガー本人であり、本人が不在の際にはその物語を歌い語るジョングルールやシュピールマンといった者であったろう（Le Goff, Jacques, *Héros et Merveilles du Moyen Âge*, Seuil, 2005. [ジャック・ル・ゴフ,橘明美訳『絵解きヨーロッパ中世の夢』原書房、2007]のトルバドゥールとジョングルールについての論考も参照)。13世紀後半のトルバドゥール写本群におけるヴィダス(伝記)やラツォス(解題）は、ジョングルールが古のトルバドゥールの詩歌を語り歌う前にその人となり作品なりを語る台詞ではなかったかとも推測できるのである。

13 世紀末から 14 世紀初頭にかけてまたミンネジンガーの写本群も成立する。ダンテが『神曲』（1307 頃– 1321)で過去(12 世紀)の歌人を記述した時代は、ルイ 9 世聖王(在位 1228-70)に仕えたジョワンヴィルが『聖ルイ伝』(1309 年）をルイ 10 世に献呈したように、同時代に生きた偉人を後世に伝えていこうとした時代である。ダンテにしてもジョワンヴィルにしても過去を現在への風刺として政治的な趣きをもって語ると同時に、先人の業績(ficta)を叙述すること（dicta）で、後世に伝える、いや同時代に事実として認識させる意図をもっていたのではなかろうか。マネッセ写本ではミンネジンガーの冒頭におかれたハインリヒ 6 世は、単に身分の序列順ということもあろうが、ルクセンブルク家のハインリヒ 7 世を理想の君主と称賛したダンテのように、チューリヒにとって現実の擁護者たる皇帝へのオマージュという政治的思惑も介在した。シュタウフェン家であっても皇帝ハインリヒ 6 世はその名を同じくするハインリヒ 7 世の予型であった。

聖人伝(vita）の模倣ともいえるヴィダ(vida)をもつトルバドゥール写本群においても、その祖ギヨーム9世から流れる南仏の歌人たちの系譜は政治的思惑をもって語られている。彼らが歌った恋愛や武勲は、アキテーヌ公ポワティエ伯ギヨーム9世とその孫娘アリエノール・ダキテーヌそしてヘンリー2世を介して、プランタジュネット家による南フランスからイングランドにもつながるアンジュー「帝国」とつながる。一方で南仏の歌人たちはトゥールーズ伯領からスペインや北フランスにも流れ出る。しかしこの12世紀の秩序はカペー朝の王権の南への聖俗に及ぶ侵入により崩壊していく。北からの十字軍はエルサレムではなく南フランスに向けられたのである。トルバドゥールやそれを伝える者はイタリアやカタローニャへと去り、ルイ9世以下のフランス王権はカペー家による地中海帝国構想を描きトゥールーズを傘下に入れる。13世紀後半には修道院のスクリプトリウムから市井に写本制作が広まり、現実の政治的状況(ficta)に対して、叙述し写本としての残すこと(dicta)で歴史を描こうとする意図の産物がトルバドゥール写本群の成立につながったのではなかろうか。

加えて、宮廷や祝祭、トーナメントの開催地をめぐるトルバドゥールやミンネジンガー、あるいは彼らの詩歌と生き様を伝えるジョングルールやシュピールマンには、それなりの情報を収集できる役割も果たせたのではないか、14世紀のギヨーム・ド・マショーから18世紀のヘンデルに至るまで日向日蔭の外交的役割を果たした音楽家の姿がそこに垣間見える。いや、中世の文脈でいえば、そのような立場の彼らがたまたま詩歌を残し、残された詩歌や物語を語り伝える者たちは公とまではいかないが密命なりを帯びた私的な情報伝達者とみなされていたのかもしれない（ドロンケ、高田康成訳『中世ヨーロッパの歌』を参照）。フランス王フィリップ4世美麗王（1285-1314）による聖ルイ伝説をはじめとする王家の神格化もプロパガンダなら、小なりといえども、聖人伝に模したヴィダスもかつての反カペーの南フランス諸権力のプロパガンダである。その先には、ダンテの危惧したようにイタリアを舞台にしたフランスとドイツ（皇帝）のせめぎ合いの時代が待っている。そして、1348年のペストと百年戦争、トルバドゥールやミンネジンガーの舞台は暗黒の幕を下ろすのである。





②11，12 世紀のフランス(緑枠と緑がアンジュー帝国）　③14 世紀初頭のヨーロッパ（Delouche(ed), Illustrated History of Europe,1992 より）

【参照　1】トルバドゥール写本

Troubadour MSS　　*)**block style:** Mss within music *)underline style: Mss with portraist and vidas

A: Rome, Biblioteca Apostolica vaticana, latini 5232　（ロンバルディア 13 世紀）

B: Paris, Bibliothèque Nationale, fonds français l 592（オック語圏[オクシタニア]13 世紀）

C: Paris,　Bibliothèque Nationale, fonds français 856（オック語圏[オクシタニア]14 世紀）

D: Modena, Biblioteca Nazionale Estense,　Estero 45 (Alpha R･4･4)（ロンバルディア 1254 年 8 月 12 日付、*Poetarum Provinciali* の表題）

E: Paris, Bibliothèque Nationale,　fonds français　1749.　（オック語圏[オクシタニア]14 世紀）

F: Rome, Biblioteca Apostolica vaticana,　Chigiani L.IV.106（ロンバルディア 14 世紀）

G: Milan, Biblioteca Ambrosiana, S.P.4　(R 71 superiore.)（ロンバルディアあるいはヴェネツィア 13 世紀後半、楽譜付含む）

H: Rome,　Biblioteca Apostolica vaticalla,　latini 3207（ロンバルディア 13 世紀後半）

I: Paris,　Bibliothèque Nationale, fonds français　854（ロンバルディア 13 世紀）

J: Florence, Biblioteca Nazionale Centrale,　Conventi soppressi F.IV.776.　（オック語圏[オクシタニア]13 世紀）

K: Paris, Bibliothèque Nationale,　fonds français 12473（ロンバルディア 13 世紀）

Kp: (Pillet-Carstens):see Y

L: Rome, Biblioteca Apostolica vaticana,　latini 3206（ロンバルディア 14 世紀）

M: Paris,　Bibliothèque Nationale, fonds français　l2474（ロンバルディア 14 世紀）

N: New York,　Pierpont Morgan Library,　819（ロンバルディア 14 世紀、The　Philipps MS）

N2: (Pillet-Carstens):see d

O: Rome, Biblioteca Apostolica vaticana, latini 3208.　（ロンバルディア 14 世紀）

P: Florence, Biblioteca Medicea　Laurenziana, Plut.41,42.　（ロンバルディア　1310 年付）

Q: Florence, Biblioteca　Riccardiana,　2909（ロンバルディア 14 世紀）

R: Paris, Bibliothèque Nationale, fonds français 22543（トゥールーズあるいはルーグ Rouergue　14 世紀、最大の楽譜付写本、ロデーズ伯アンリ 2 世 1236 頃– 1304*)による編纂）

S: Oxford, Bodleian Library, Douce 269.　（ロンバルディア 13 世紀）

Sg: (Pillet-Carstens):see Z

T: Paris, Bibliothèque Nationale,　fonds français 15211.（ロンバルディア 13 世紀末）

U: Florence, Biblioteca Medicea Laurenziana,　Plut.41,43（ロンバルディア 14 世紀）

V:　Venice,　Biblioteca Nazionale Marciana,　278 (fr. App. cod. XI)（カタロニア 1268 年付）

(W): Paris, Bibliothèque Nationale, fonds français　844　（アルトワ　1254-1280 頃、トルヴェール写本 M、ナバーラ王 テオバルト 1 世の *chansonnier du roi*、ナポリ王カルロ 1 世による制作、トルバドゥールの楽譜付を含む）

(X): Paris, Bibliothèque Nationale, fonds français　20050（ロレーヌ 13 世紀、トルヴェール写本 U、Chansonnier de Saint-Germain-des-Prés）

Y: Copenhagen,　Kongelige Bibliotek,　Thott 1087 (Pillet-Carstens, Kp)（フランスあるいはロンバルディア 13 世紀）

Z: Barcelona, Biblioteca de Cataluña, 146(Pillet-Carstens, Sg).（カタロニア 14 世紀、Cançoner Gil）

a: The lost manuscript compiled by Bemart Amoros,　represented by the following copies:

Pillet-Carstens a:　Florence,　Biblioteca Riccardiana,　2814

Pillet-Carstens　a1:　Modena , Biblioteca Nazionale Estense ,　Campori　Appendice 426, 427, 494 (formerly Gamma.N.8.4.1 1－13).

b: The lost manuscript compiled by Miquel de la Tor,　represented by the following copies:

Pillet-Carstens b: Rome, Biblioteca　Apostolica vaticana,　Barberiniani 4087;

Pillet,Carstcns e: Rome, Biblioteca　Apostolica vaticana,　Barberiniani 3965

c: Florence, Biblioteca Medicea Laurenziana,　Plut.XC inferiore 26.

d: Berlin, Staatsbibliothek,　Phillipps　1910 (Pillet-Carstens N2; Pillet-Carstens d is merely a copy from K and may be disregarded [Zufferey 7－8].

e: Rome, Biblioteca Apostolica vaticana,　latini 7182 (no siglum in Pillet-Carstens; for Pillet-Carstens e, see under b).

f: Paris, Bibliothèque Nationale,　fonds français 12472.

VIDAS & Razos MSS

Mainly 20 Mss,　compiled in northern Italy,: A,B,H,I,K (13th C), other (14th C)

A: Rome, Biblioteca Apostolica vaticana, latini 5232
B: Paris, Bibliothèque Nationale, fonds français l592
H: Rome, Biblioteca Apostolica vaticalla, latini 3207
I: Paris, Bibliothèque Nationale, fonds français 854
K: Paris, Bibliothèque Nationale, fonds français 12473

【参照2】オック語文芸の興隆―13, 14世紀の著作

Raimon Vidal, *Razos de trobar*（1210 頃） 作品註解：俗語の中でのオック語の優位を擁護。オック=イタリア語辞典。Uc Faidit, *Donatz proensals* （1243 頃） プロエンサのドナートゥス：ラテン語文法家ドナートゥス Aelius Donatus のオック語版。イタリア人のためのラテン=オック語辞典の体裁。

Anonymous,*Doctrina de compondre dictats* （13 世紀末） 詩歌注釈：おそらくは Raimon Vidal による。詩歌のジャンルと注解。ラツォスや Jaufre de Foixa の *Regles* を含む。

Matfre Ermengau, *Lo breviari d'amors* （1288 から） 愛の聖務日課書：宗教的事典、最後の〈Perilhos tractatz d'amor de donas, seguon qu'en han tractat li antic trobador en lurs cansos〉はオック語文法書。

Terramagnino da Pisa, *Doctrina d'acort* （1282–96、サルデーニャ）索引注解：ラツォスの補遺と注解。残存写本僅少。 Doctrina de cort 宮廷論と誤解され残されることも。

Jaufre de Foixa の *Regles de trobar* （1289–91、シチリア）作法：*Razos de trobar* の議論、トルバドゥールの詩歌の引用例多し。*Vers e regles de trobar* の別記も。

Berenguer d'Anoia, *Mirall de trobar* （14 世紀初頭） 詩作の鏡：レトリックや誤謬にも言及。詩歌の例多数。

Cançoneret de Ripoll （1346、ルーションあるいはセルダーニュ Cerdagne） リポルのシャンソニエ：詩のジャンルを含む文法。*Doctrina de compondre dictats* と *Leys d'amors* も含む。

Guilhem Molinier, *Leys d'amors* （1328–37、トゥールーズ）愛の作法：1323 年以来作成。詩作サークル（学派）ガイ・サバール[喜ばしき知恵]会 Consistori del Gay Saber とバルセロナ会 Consistori de Barcelona における散文詩作法の教科書。正式名称は「愛の作法と呼ばれるガイ・サバール会の花々」*Las flors del Gay Saber, estiers dichas las leys d'amors*

Anonymous, *Leys d'amors* （1337–47、トゥールーズ） 愛の作法：補遺版。

Joan de Castellnou *Leys d'amors* （1355、トゥールーズ） 愛の作法：補遺決定版。

Raimon de Cornet *Doctrinal de trobar* （1324 頃、1341 以前） 詩作注解：アラゴン王ペドロ 4 世に献呈、 Guilhem Molinier の「*Leys 愛の作法*」の構成を踏襲。

Joan de Castellnou, *Glosari* （1341） 註釈：*Doctrinal de trobar* 詩作注解の註釈

Joan de Castellnou, *Compendi* （1341 以前） 要約集：「愛の作法 Leys」などに則さないことで除外された「不備」のカタログ。正式名称は *Compendi de la conexença dels vicis que.s podon esdevenir en las dictats del Gay Saber*: ガイ・サバール[喜ばしき知恵]に則さない不備の要約

Jaume March II, *Libre de concordances* （ *Diccionari de rims*）（1371） 索引集：オック語韻文のカタロニア語訳。

Luys d'Averçó, *Torcimany* （14 世紀末） 訳詩集：韻律集とカタロニア＝オック語辞典

概要

本稿はトルバドゥール写本Les chansonniers provençaux I et K (Paris, BNF, ms.Fr.854 et 12473)とマネッセ写本（大ハイデルベルク歌謡写本）Manessische Liederhandschrift (Grosse Heidelberger Liederhandschrift)（Heidelberg,Universitätbibliothek, Pal.germ.848）における、挿図やイニシャル図像に描かれた「宮廷歌人」の情報を読み解くとともに、描かれた人物を介して伝えられた情報の意味を読み解く試みである。

テキストとコンテキストとして、まずはトルバドゥール写本とマネッセ写本の成立事情と性格を概観する。トルバドゥールの詩歌は主要なもので20数冊の写本によって伝えられ、その多くは13世紀末から14世紀にかけ北イタリアで制作された。楽譜が詩歌に付されているものはG,M, Rの3冊であり、伝記（Vida）と作品解題（Razo）が記された5冊ほどある。その中のI,Kのイニシャル図像を取り上げ、その図像とテキストの一致をいくつかの例から見ていくと、物語化される「トルバドゥール」の姿が見て取れる。さらに分析していく過程で騎乗図像に注目すると、そこには騎士とトルバドゥールの関係、写本年代の武具などの測定によりトルバドゥールの活躍していたとされる時代と写本成立時代の推定と肖像の意味と意図も窺うことができる。同様に、14世紀初頭にチューリヒのマネッセ家によって制作注文されたとされるマネッセ写本のミンネジンガーの肖像を分析すると、物語化される過程とともに騎士と武芸試合（トーナメント）とミンネジンガーの関係も明らかになってくる。最後に、なぜ物語が伝えら書き残されるかについて、理想の宮廷と騎士道物語と関連させる文学史的解釈の有効性とともに、「ficta（事実）　とdicta（叙述）」概念を提唱し、1300年前後の政治的コンテキストとの関連を指摘する。